

ホトトギス

四月号

ホトトギス

昭和二十八年三月二十八日運輸省特別換米証雜誌第六二七号
平成二十八年四月一日発行(第四百十九卷第四号)



俳句随想〔四百六〕

汀子

一年の総決算のような慌ただしい日々がやって来た。様々な依頼の文章、選句、旅、句会等々、俳人となった以上はそのような仕事を頂くのは嬉しく、喜ばなければならぬ。今年の総決算のように一年を振り返って決めなければならぬ選句や文章、いまそれらを一つ一つ遣り果せていくがまだまだ仕事の数は減ってはくれない。多分皆様にご迷惑をおかけしているに違いないと申し訳なく思う。

最優先の「ホトトギス」の仕事であるが、「天地有情」に季題が無かったり、「……や・かな」と切字重なりがあったりする。それと形容詞に「……けり」を付けることが出来ないのを、つい使ってしまった一句もある。「……美しけり」は駄目である。「……悲しけり」も同じように使えない。それと、脱字も増えたのは、一字書き替えようと消したまま書き足す字を書かないまま投句されることも増えたが、そこに足す字が幾つかあって、こちらで補足出来ない場合は一句か没にしてしまう。

私もやりそうなので気をつけて何度も読み返すことにしているが、やはりうかうかと誤字・脱字をしてしまっていることがある。年齢の所為には出来ない。時間に余裕を持つてしなければならぬ時には何とか遣り繰りしなければならぬであろう。ふと、気がついたら随分時間を無駄に使っていたと後悔することが多い。時間は待つてはくれない。虚子は「やれることからやるのがよい」と言っていた。やがて順調に仕事が出来て行くのを期待して励んで行きたい。

旬日記 汀子

平成二十七年四月四日 芦屋ホトギス会

三椏の花の仔細は問はずとも引越すや築地市場と桜餅

四月五日 下朝句会

境界のなき囁の一部分何もかも春告ぐ木々よ草々よ水音に春の心を置きそめし黄桜の主張はさくらいろならむ

四月六日 ロイヤル俳壇

草餅を食べ終りたる後始末臘月皆既月蝕見えぬ空実感のやがてありつつ春の日に励まむと思ふばかりや臘月

四月八日 虚子忌

年重ね無情の花の雨とこそ花冷をいとはぬ五十七回忌

四月九日 清交社

訃報聞き花冷しるき夕べかな早朝の離陸旋回春の海花散らす風にさらはれさうになる花散つてしまへば励むことのありうららかに朝の来てぬし旅帰るか冷の少しゆるみし家路帰るかく荒る虚子忌の雨と記憶せん

四月十日 工業倶楽部

桃の花飾りて客を待つ心東京は近し遠しと春寒く百千鳥には境界のなかりけり百千鳥よりはじまつてゐる径花の下句碑の歳月ありにけりみよし野や花の遅速は言ふまじく

四月十一日 吉野山くつろぎの旅

近くより遠くの花の山と見るふり返るときさくら色吉野山

これよりは散るが風情の花の山結肩を踏めば又散るさくらかなみ吉野へ花の序奏をくぐり来し

四月十一日 第二句会

闇深き花の吉野の宿りかな夜の帳降りて桜に包まるる春寒の何か足らざる思ひかな

四月十二日 第三句会

花追うて西行庵へ行きし日も朝棹月を抱きてまだ覚めずもう帰路を思うて花の別れかな朝月もおぼろに置きて吉野山はや花の別れ二日の旅なごり花眠り宿しづもりてありにけり皆家路迎るなごりの花とこそ

四月十四日 大阪倶楽部

麗かな旅路を思ひ返しけりみよし野の花心なほ尽きず春昼や雨の家居もくつろげのみよし野の空のつづぎの花抜けて

四月十四日 綿業倶楽部

初桜とは忽ちに遠ざかるみ吉野の花の旬日追ふことも蝶さへも思ふけぬ風の日なりけり奇蹟とも思ふ回復あたたかしなつかしき邂逅なりし春めける又雨が降る春日差ありながら蝶はらと落ちたる如く舞ひ上るみよし野の花の旅路はもう遠し花疲などは忘れてをりしこと

四月十七日 アネモネ句会

春風のやうに心をつづりたく稿債を今は忘れて蝶の屋

四月十八日 句会と講演の会

風船を飛ばして大人ばかりかな増えてゆく庭の一劃竹の秋風船の風にははれゆきにけり

四月十九日 時雨句会

蛙塗の仕上げの夕日とどまらずさつきまでなき春の雲天心に明るさをいざなふ春の雲ならば鳥の巣と思へぬ鳥の巣なりけり

四月二十一日 有恒俳句会

初桜庭の春秋くり返す風光る庭に植糸足すものあまた庭師来て春とどのへてゆく一日風のみにあらぬ落花を誘ふは初桜咲いてをりしと気づくまで

四月二十一日 無名会

囁を聞き分けて行く道案内みよし野の旅のはじまる弥生かな囁を抱きて森の深ざかる旬日の花の印象遠ざかる咲くものも散るものもはや弥生尽心添えずとき囁に包まるる書きすすむ弥生の庭の物語

四月二十三日 きさらぎ会

やうやくに晴れしおぼろの月欠けて何といふことはなぬ長閑になり過ぎて雨多き日のつづきたる春の月

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年四月二日 蕉心会

駅うらら新入社員どどどどど
亀鳴くや君はやつぱり謎の人
深川芭蕉通りすは落花舞ふ
蕉像の後ろに桜あつたつけ
落椿カメラ目線でありにけり
四月馬鹿少し本気にしたる人
花笛を花の季題にしたき人
四月四日 芦屋ホトギス会
春眠に富士見逃せし車窓かな
桜餅みよし野の旅近づけて
句 心 と 女 心 と 臚 月
イースターエッグ作りに励みし日
四月五日 野分会吾屋例会
松の花震災句碑を烟らせて
海風に育つ 芦屋の松の花
観潮に渦の怒つてをりにけり
雨音に 水音に 松の花の黙
観潮や平家の裔といふ誇り
四月五日 虚子記念文学館投句
春眠を西へと運ぶ鉄路かな
四月七日 カトリック新聞選考吟
四句節ミモザの花に彩られ
四月八日 虚子忌
春泥の一步 忌心重ねつつ
落椿 楚々 忌日の彩りに
虚子詠みし花の遅速を問ふ忌日
四月九日 土筆会

忌心といふ色に咲く初桜
走る子に風は素直でありにけり
蝌蚪生れて池に秩序の生れけり
待つ心とはみよし野の初桜
初桜もう散ること執しをり
四月十一、十二日 吉野くつろぎの旅

水音と生活の音に 散る桜
そこに花咲いてゐるから歩を伸ばす
一片は落花柱の序曲とも
落花敷きつめて虚しく閉ざす茶屋
吉野 杉すくと山桜は 灰と
思ひ出と共に朽ちゆく花見茶屋
春泥を踏まねば着けぬ絶景へ
落花 一片 青空を誘へる
夜桜へ木星距離を近づけて
花明り山気靈気を閉ぢ込めて
一人より君と二人で花の坂
柏餅残りたる葉に旅惜む
早出組落花に見送られてをり
四月十三日 朝日カルチャー若草句会
永き日や君と二人で居ればなほ
風光る時みよし野は散り初むる
みちのくに俳誌の歴史花林檎
津軽富士まだまだ白く花林檎
永き日を短く使ひ切る吉野
風光る 又々新車買ひし人
四月十五日 「かずさホトギス会」 五百五十号記念句会
祝ぎ心とは春潮の高さにも
松の花つんと未来を指してをり
春光に映えて真紅のまりかな
うららかや上総に集ふ賀の縁
四月十六日 登高会

春惜む自動改札ぬけるより
鳥の巣に木々賑はつてをりにけり
惜春の人とはみよし野に集ふ
四月十八日 ホトギス社句会
手を離れゆく風船といふ自在
俳磚の庭淋しく風船といふ竹の秋
四月十九日 野分会東京例会

松の花二十年てふ地震の痕
乗る前に観潮船を恐がる子
観潮をして釣をして橋渡る
四月二十日 北國文芸選考吟
花の旅新幹線は伸びてゆく
四月二十一日 むさし野吟行会
江戸城の石垣古りて暮の春
オフィス街指呼に城跡草若葉
天守閣樹齡明かさず松の花
落花敷きつめて大江戸五百年
花屑も厭はず 吉田茂像
四月二十二日 目黒学園句会
昭和の日何時も会議に明け暮れて
一瞬といふ寄居虫の転居かな
巻貝の足が出るよりがうなかな
春の暮 太白星を従へて
昭和の日歴史の記憶皆昭和
四月二十八日 若水句会
蜂の巣に見下され九る虚子旧居
先づ杉菜見付けてよりの川親し
制服を大きく見せて入学児
新任の教諭新入生迎へ
入学児一人六人父母祖父母
四月三十日 カトリック新聞選考吟
忌日人復活祭の心もて

雑詠 廣太郎 選

威勢よき淡阿に釣られ西の市 長岡 安原 葉
 酉の市 身長漢紛れ来る 同
 西の市昨日でありしがらんだう 同
 寝ころんで子規の目線で見ると糸瓜 芦屋 黒川悦子
 露けしや子規の机に触れてみて 同
 硝子戸の子規の天地にある秋思 同
 もう未来しかなきものが冬木なる 神戸 後藤立夫
 隙間風にも重い風 軽い風 同
 顔見世の向かうに舞妓見える席 同
 あきらかに案山子と分かる案山子かな 龍ヶ崎 今橋眞理子
 小春日のこんなところに富士見えて 同
 足もとの木の実拾へば旅情かな 同
 雑踏を役者あらはれ熊手買ふ 東京 田丸千種
 東京の灯はメタリック冬霞 同
 明日よりは下山の僧と葉喰 同
 大地病みあるか今宵も蚯蚓鳴く 相模原 木村享史
 一と啜りして新蕎麦にまがひなし 同
 尾を巻いて消えてゆくのも秋の雲 同

新米を炊いて決勝戦の朝 神戸 山田佳乃
 時代祭へと大将の髭つけて 同
 茶の花の包みきれざる黄を零す 同
 クリスマス待つ金の鈴銀の鈴 東京 今井千鶴子
 噓してつぶりたる目を開けしとき 同
 ハイウエイ狸が出でし事故といふ 同
 チャペルいま諸霊のミサか初時雨 同
 福耳の女将が小さき熊手買ふ 同
 熊手持ちたからくじ買ふ列につく 同
 秋草のあはれも刈つてしまひけり 熊本 岩岡中正
 文机に父のこゑある秋の暮 同
 人ひとり欠けたる秋を惜みけり 同
 動力を持つかに落葉吹かれをり 東京 橋本くに彦
 句座に居ることが勤労感謝の日 同
 年忘暮しの区切り早めけり 同
 五七五もて七五三言祝ぎぬ 奈良 古賀しづれ
 鼻といふ第五の手足象小春 同
 己が影踏みしだき象冬ざる 同
 かまぎりの果てねばならぬ門のぼる 福山 竹下陶子
 聖堂の祈りへばつた飛びにけり 同
 うら若き案山子を恋ふる月のあり 同
 マンションの庭によちよち日短か 松本 唐澤春城
 マンションの庭に点燈冬ざる 同
 景色見るだけのマンション冬籠 同

雑詠句評(三月号より)

恵明・眞理子・葉

とほ歩・中 正・保 佳

静 龍・肖 子・むつみ

美 奇・廣太郎

繋りて時代祭の時代かな 神戸 後藤立夫

「時代祭」、京都平安神宮の神幸祭、十月二十二日に行われる。明治二十八年(一八九五)に、桓武天皇が都を京都に定められ一千百年に当たるを記念して始まった。平安時代から明治維新までの風俗の変遷を見せる行列がつづく。この句の「繋りて」が正しい。列がつながりてと、時代がつながりてということを簡潔に表わしている。さらに「時代かな」という。まさにそれは、悠久の時への詠嘆である。十七音に、これだけのものを詠みこめる。それをなしとげるのは、作者ならではのこと。俳句ならではのこ

と。(恵明)

毎年十月二十二日に京都の平安神宮で行われる、日本の平安時代から明治維新までのそれぞれの時代の衣装を身に纏って行列が行われる「時代祭」は、京都の三大祭として定着しているが、そのユニークな行列が見事に写真されている。タイムスリップをしているような楽しさが伝わってくる。(廣太郎)

露の身や小さき溜息終となり 高松 永森ケイ子

看取る者にとって、息を呑むような瞬間である。引きとどめる術もなく「小さき溜息」は、はかなくも終となり、逝く人も残る身もまた「露の身」であることを思い知らされる。なんとも辛く悲しいその刻が、万感の思いを込めた「露の身」という季題によって、昇華されてゆくようである。(眞理子)

正に御臨終の瞬間が見事に表現されている。最後の息を引き取る場に立ち会っている人の気持は尋常ではないものがあるのだろうが、敢えて淡々と述べることによって悲しみが一層伝わってくるのである。季題の力が悲しいまでに發揮されており、読者をその場に引き込んで行くのである。(廣太郎)〈以下略〉

天地有情

心子選

きつとある自然治癒力日向ぼこ
 人も木も上手に枯れてゆくのかも
 みんなに首都の喧騒届かざる
 園丁に整へられてゆく緑
 月を見てやさしくなつて寝まるかな
 手を抜けば抜いてすむこと冬支度
 堂縁を掃くも枯葉の二三枚
 大綿や北国は荒れ止まざると
 居るはずの人の居らざる花の冷
 ゆつくりと花の時間を散りづづく
 筆硯の佳境に入りて小鳥来る
 初冬のみほとけのまなざしに会ふ
 御堂の扉開けて忌の鐘時雨れけり
 時雨るるや父の忌夫の忌を修す
 帰り花ほろく零れきたるとき
 ふと呼ばれたるかに逢へし帰り花
 梶の葉に書くならやはり恋の歌
 老の舌水羊羹が苦いと

神戸 和田華凜
 同 稲畑廣太郎
 東京 相模原 木村享史
 同 長岡 安原 葉
 同 東京 今井肖子
 同 熊本 岩岡中正
 同 千葉 大木さつき
 同 東京 河野美奇
 同 神戸 後藤比奈夫
 同

菊月や晴れて欲しき日みな晴れて
 よく晴れて木の実降る音弾けたる
 一仏のごとくに落花曼陀羅に
 ぼうたんのホ句のうてなに乗る日いつ
 打ち合はせ終へ羅に着替へけり
 竹落葉踏みて大きな寺男
 時雨忌やわが行く末に迷ひなく
 母の忌やしぐれ催ひの墓に佇ち
 巡礼のロザリオ光る小六月
 主を讃へチャペルも庭も小六月
 冬晴の晴とは表から晴れる
 ちやんちやんこにも性格のあるのかも
 石狩のポプラ黄葉はすぐに散る
 山黄葉街も黄葉に札幌市
 冬あたたか父の故郷は我が故郷
 尊徳像未だ健在小六月
 家事一切する気がなくて小六月
 大綿の一瞬うかぶ夕日かな

龍ヶ崎 今橋真理子
 同 福山 竹下陶子
 同 神戸 浜崎素粒子
 同 東京 山田閨子
 同 東京 大久保白村
 同 神戸 後藤立夫
 同 熱海 嶋田一步
 同 吹田 大橋 暁
 同 東京 今井千鶴子
 同

それから

稲畑汀子

「え？ 先生、お怪我をされたのではないのですか？」

「はい、もう二週間経って何とか自分の顔が戻って来ました」

下から覗き込むように私の顔をぐるっと眺めおわると、誰もが驚いたように声をかけて下さった。

「紫色の部分は地球の引力が働いて血が顔の顎のほうへ降りて行ったのだそうです。時間が経てば紫色が消えて行くのだそうです

よ」

「へえ？」

怪我のあと一晩入院して、次の日の十二時に退院の許可を頂いた。本郷桂子さんが退院に付き添って下さり、吉田先生が私の車を持って来て下さった。

「運転はどうなさいますか」

「吉田先生に運転して頂きましょう。よろしく」

我が家に帰り着いてほっとした。直ぐに宮崎先生に電話を掛けた。

「先生、私、大阪で転んで歯が折れてしまっ、今から阪大の歯

学部へ行きたいのですが、何とかなるでしょうか」

「それは大変だ。すぐにいらして下さい。私の孫弟子に当たる教授が居りますから連絡しましょう」

「申し訳ございません」

「すぐにいらして下さい」

何時もは自分で運転して行くが、タクシーを頼んだ。朝日俳壇に行かれないという連絡と工業倶楽部の欠席の連絡も済んだ。

「あーあ」

昨日から溜息ばかりついていて。歯学部ではすぐに見て頂いたが、転んだばかりの腫れが引いていないので取り敢えずの治療をして頂いて帰ることにした。何時も頼む芦屋の阪神タクシーの運転手に待ってもらっていたのでほっと一息ついて車に乗り込むと声をかけてくれた。

「大変でしたねえ。まあその程度で済んでよかったですではありませんか」

「そうだわねえ。足でも折れていたら歩けなくなってしまうしねえ。後は日にち薬だわ」

土曜日の午後、早速お見舞いの方がいらしてベルが鳴った。朝日新聞俳壇担当の宇佐美さんである。腫れ上がった私の顔を見て「うっ」と言葉を詰まらせた。

「先生大変でしたねえ。仕事は送りましたから出来る時にして下

さい。長谷川權先生からおことづけがあります」

「え？どれどれ」

「来週のゲラと、その横に書いて来ましたメモを読みます」

「長谷川權先生から」

「鉄の女へ」

鯛雲ながめてしばし休まれよ

というおことづけです」

「あれまあ、鉄の女ですか。よろしくお伝え下さい」

「私ね、新年の新春詠が一句だけもう出来たのですよ」

「へえ、怪我の俳句ですか？」

「ええ、そうです」

宇佐美さんが帰られたあと早速、權さん宛に葉書で一筆認めて

投函した。

「鯛雲より頂きし元気かな（汀子）有難うございました。」

私の怪我は皆の知るところとなった。毎月何う各地の俳句会や

「西の虚子忌」も欠席となった。

「汀子ちゃん大丈夫？」

句会の最中だと言いながら星野椿さんから電話が掛かった。

「大丈夫ではないけれど大丈夫よ」

「あら元気な声じゃないの」

こういふこともあった。

二週間ほどして東京から電話が掛かった。心配したTさんからである。

「汀子先生、お転びになっではいけません」

同じことを繰り返して三十分以上電話は切れなかった。

「Tさん！ 私今、出席出来なかつた選句の仕事が山積みで、大

変なの。心配して頂くのは分かるけれど電話を切ります！」

がちゃん！と電話を切った。暫く胸の動悸が納まらなかつた。

